

かかわる力を育む幼小一貫の 道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究 (3)

宮里 智恵 神山 貴弥 鈴木由美子 大橋美代子
加藤 秀雄 君岡 智央 池田 明子

1. 問題の所在と本研究の目的

本研究は、広島大学附属三原学園の小学4年生と幼稚園年長児のペア活動を研究対象とし、人とかかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラムの開発に必要な基礎資料を得ることを目的としたものである。本年度はその第3年次である。

近年、青少年におけるいじめやひきこもりなどの反社会的行動や非社会的行動の増加が問題となっており、その原因として対人関係能力の未発達が指摘されている(中里・松井, 1997, 1999; 住田, 1999; 山本, 1999)。

対人関係能力は人と直接かかわることで育成されるが、その未発達の背景には少子化や核家族化、遊び場の喪失、放課後時間の喪失など、子どもの対人関係能力を育んできた仲間・空間・時間といったいわゆる「三間(サンマ)の喪失」があるとされる(住田, 1999)。

いじめやひきこもりなどの問題行動は青年期に顕在化するとされてきたが、近年は低年齢化の傾向にある。さらにそういった問題行動の芽は幼児期・児童期に発しているという指摘もある(森, 1999)。これらのことから、対人関係能力の育成には幼児期や児童期に人と直接かかわる体験を積ませることが有効と考えられる。

「三間の喪失」を背景に、近年においては対人関係能力の育成は大きく学校教育に委ねられることになった。学校教育においては、人との望ましいかかわり方の学習は、主に道徳の授業や道徳教育を通して行われているが、それらは架空の読み物をもとにした指導であったり、事例対処的な指導であったりと、対人関係能力の育成を目的とした系統的な教育にはなり得ていない。

そうした中、広島大学附属三原学園においては、園

児・児童・生徒の異校種異年齢交流活動を行っており、子どもの対人関係能力の育成に成果をあげている。特に、小学4年生と幼稚園年長児から開始されるペア活動は、小学1年生と5年生、小学2年生と6年生へと継続され、数年の間に年下と年上の両方の立場を経験する対人関係能力育成のプログラムである。このペア活動に関する先行研究では、年上の子どもは年下の子どもの気持ちを察したり、相手の立場に立って行動したりし、年下の子どもは年上の子どもから優しくかかわってもらった経験を自分が年上になったときに発揮しようとする事が明らかになっている(宮里, 井上, 鈴木, 石原, 岡野 2005; 神山 2005; 宮里, 石原, 神山, 鈴木, 君岡 2006)。

2. 第2年次までの研究と第3年次の研究の目的

第1年次の研究では、小学4年生を対象にペア活動に対する意識の変容を、質問紙法を用いて量的に捉え、次の点を明らかにした。

①小学4年生は、年間を通してペア活動に「楽しさ」を感じている。

「楽しさ」の要因は、ペア幼児への愛着感が年間を通して大きく、さらに交流活動を繰り返す中で、「ペアとうまく話すことができた」「ペアが楽しんで」と自分にかかわる力がついたことやペア幼児の喜びを自分の喜びと感じる子どもが増えてくる。

②小学4年生は、年間を通してペア活動に「不安感」も抱いている。

「不安感」の要因は、交流初期の時期においては、「ペアとうまくかかわることができるか」という未経験の活動に対する不安が多いが、交流活動を繰り返す中で、「ペアが言うことを聞かない」「ペアが考えていることが分からない」といったかかわることを通して感じる不安感が多くなる。

このように第1年次の研究では、小学4年生はペアとの交流活動に対して「楽しさ」と「不安感」の両方を感じていることが分かったが、特に「不安感」がもたらす影響については明らかにできなかった。

第2年次の研究では、小学4年生を対象にペアとのかかわり方の変容を参与観察法（エスノグラフィー）を用いて質的に捉え、次の点を明らかにした。

①ペア活動の当初から相手とうまくかかわることができる子どもがいる一方で、うまくかかわることができない子どもがいる。うまくかかわることができない子どもの中には、交流することを嫌だと感じたりペア幼児を好きになれないことを悩んだりする子どももいる。

②ペア活動を繰り返す中で、ペア幼児とのかかわり方を変えている子どもがいる。

このように、第2年次の研究では、ペア幼児との交流の様相は子どもによって異なることが明らかになったが、特にうまくかかわることのできない子どもがどのような点で問題を抱えているのかについては明らかにできなかった。

そこで、第3年次の研究では、小学4年生が異年齢交流活動におけるペア幼児に対してどのような気持ちを抱くのか（感情）、ペア幼児との交流活動に良さを感じているのか（認知）、ペア幼児との交流活動を続けたいと思うのか（行動意図）といった側面から子どもの態度を詳細にとらえるとともに、そういった「感情（affect）」「認知（cognition）」「行動意図（behavioral intention）」を生み出している背景を明らかにする。

ここで小学4年生の「感情」「認知」「行動意図」を問題にするのは、これらが人の態度を構成する3成分であることによる。人の態度が、相手に対する「感情」「認知」「行動意図」の3成分から構成されているとしたのは、ローゼンバーグとホブランド（Rosenberg, M.J. & Hovland, C.I., 1960）である。彼らによれば、態度の3成分間には強い関連性があり、人は3成分を一致させようとする傾向がある。態度理論によれば、人の態度は経験を通して次第に形成され、「感情」「認知」「行動意図」の3成分が高いレベルで一致したとき、その抵抗性や持続性は最も強くなるとされる。このことから、異年齢交流活動という経験プログラムを通して、ペア幼児に対する態度の3成分を高レベルで一致させることができれば、子どもには抵抗性や持続性の強い態度が育成されたと言えるのである。

そこで第3年次の研究においては、ペア活動に対する小学4年生の態度を3成分の側面から明らかにする。そして3成分の一致の程度によって児童を分類し、

ペア活動に対して問題を抱えている児童を明らかにする。更に各グループの抽出児童を対象に面接を行い、そのグループの児童が抱えている問題の詳細を明らかにする。これによりペア活動に対する態度の実態とそれを生み出している背景を明らかにすることが第3年次の研究の目的である。

3. 研究の方法

ペア活動に対する小学4年生の態度を、参与観察法、質問紙法、面接法を用いて、量的質的両面から明らかにする。

(1) 参加者

広島大学附属三原学園の年長児63人とペアを組む小学4年生79人。この内2人組（年長児1人に対して小学4年生1人）は47組、3人組（年長児1人に対して小学4年生2人）は16組である。3人組を構成しているのは、男子で22人、女子で10人である。

(2) 実施時期

参与観察・質問紙調査は2007年5月～7月

面接調査は2007年7月下旬

(3) 手続き

5月～7月までの4回（1回目は交流前。また、運動会期間中を平均化して1回と捉える）の交流活動について参与観察と質問紙調査を実施し、態度の3成分の一致によって児童を分類する。各グループの特徴をつかむとともに、各グループの抽出児童に対して個別の面接調査を行う。

(4) 5月～7月の交流内容

5月20日：交流前

5月22日：出合いの活動（自己紹介と自由遊び）

6月11・18・22・27日：運動会練習と運動会

（ペアでの踊りを教え、運動会で踊る）

7月17日：転がしドッチボールと自由遊び

(5) 参与観察の方法と内容

交流活動に小学4年生の担任教諭が参与し、児童の交流の様子を観察した。観察の視点は、ペア幼児と意欲的にかかわっているか、2人組と3人組では4年生のかかわり方に違いはないか、などである。

(6) 質問紙調査の方法と内容

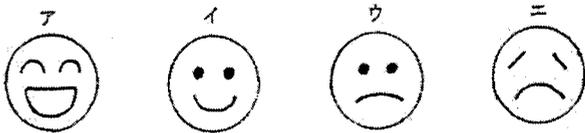
ペア幼児に出会う前段階の態度について1回、学級活動の時間を用いて質問紙調査を行った。また、出合い後は、交流ごとに交流のあった日のうちに質問紙調査を行った。第1回目の調査のみ学級担任が問題文を読み上げ、一斉に記入させる方式をとった。第2回目以降は児童各自が問題文を読み進め回答した。所要時間は約15分間であった。質問紙の内容は、ペア活動に対する「感情」「認知」「行動意図」について作成した。

具体的には、次の通りである。

出会い前の質問紙調査

①感情

もうすぐ幼稚園のペアさんとの交流が始まりますね。あなたは今、どんな気持ちですか。次の顔の絵の中からあなたの気持ちに近いものを1つ選んで、記号に○をつけましょう。



②行動意図

あなたは、ペアさんとの交流を続けてしたいですか。次の中からあなたの気持ちに近いものを1つ選んで、記号に○をつけましょう。

- ア 続けてしたい
- イ まあまあ続けてしたい
- ウ あまり続けてしたくない
- エ 続けてしたくない

③認知

あなたは、ペアさんと交流することは、よいことだと思いますか。次の中からあなたの考えに近いものを1つ選んで、記号に○をつけましょう。

- ア よいことだ
- イ まあまあよいことだ
- ウ あまりよいことではない
- エ よいことではない

出会い後の質問紙調査

①感情

今日の交流はどうでしたか。交流でペアさんといっしょにしたことや話したこと、ペアさんにしてあげたことなどを思い出しながら、次の顔の絵の中からあなたの気持ちに近いものを1つ選んで、記号に○をつけましょう。



②行動意図

今日のように、ペアさんと交流することを、これからも続けたいですか。次の中からあなたの気持ちに近いものを1つ選んで、記号に○をつけましょう。

- ア 続けたい
- イ まあまあ続けたい
- ウ あまり続けたくない

エ 続けたくない

③認知

今日のように、ペアさんと交流することは、よいことでしょうか。次の中からあなたの考えに近いものを1つ選んで、記号に○をつけましょう。

- ア よいことだ
- イ まあまあよいことだ
- ウ あまりよいことではない
- エ よいことではない

全ての質問項目は4件法で評価させ、項目得点は4-1点とした。「運動会」では練習を含めて計4回の交流を行ったが、これらを合計して平均値をとり、それを「運動会」の得点とした。

(7) 児童の分類

4回の質問紙調査における感情得点、認知得点、行動意図得点を用いてward法によるクラスター分析を行い、児童を分類した。

(8) 面接調査の方法と内容

分類した児童に対して、より具体的な記述を得るため、面接調査を行った。各グループから数名ずつを抽出し、放課後の時間などに面接者1人が個別に実施した。参加者の緊張を和らげるため、面接者は筆記記録は行わず質問と受け答えのみを行った。記録はビデオテープに録画し後から再生した。所要時間は約10分間であった。面接は半構造化面接とし、1問目~10問目は共通の内容とし、11問目からは各グループに固有の内容とした。1問目~10問目の質問は次の通りである。

- ①あなたのペアさんの名前は何ですか？
- ②あなたはペアさんを何と呼んでいますか？
- ③ペアさんはあなたを何と呼んでいますか？
- ④夏休み前までに色々交流しましたが、楽しかったですか？
- ⑤どんなところが楽しかったですか？
(どんなところが楽しくなかったですか？)
- ⑥楽しくないときもありましたか？
(楽しいときもありましたか？)
- ⑦どんなときがそうでしたか？
- ⑧ペアさんのことは好きですか？
- ⑨どんなところが好きですか？
(どんなところが好きではないですか？)
- ⑩これからの交流でどんなことがしたいですか？

11問目以降の質問については、「4. 研究の結果と考察 (3) 面接調査」に示す。

4. 研究の結果と考察

(1) 参与観察

交流前の段階では、小学4年生のほとんどが「交流が楽しみだ」「ペアになる子はどんな子だろう」「自分が幼稚園年長児だった時にしてもらったようにペアさんに優しくしてあげたい」などと語っていた。

第1回目の交流では、ペア幼児と仲良く遊ぶ児童が多く観察されたが、中にはペア幼児が急に走り出したり小さな声でしか反応しないことに戸惑ったりする児童もいた。交流後には、「楽しかった」「かわいかった」という感想の他、「ペアがどこに行くか分からず、走り回って疲れた」などの感想もあった。しかし、交流を負担と感じている児童はいないものと思われた。

第2回目の交流となる運動会では、ペアと一緒に踊りを踊る演技があり、小学4年生は事前に踊りを覚え、それをペアに教えるという役割があった。運動会までの交流は3回で2週間ほどの期間があったが、その間、ペアによってはうまくかかわっていない者も出てきた。特に小学4年生が2人で幼稚園児が1人の3人組では、小学4年生2人のうち1人が別のことをしたり何もしなかったりする様子が観察された。それは男子の3人組に顕著であった。また、2人組においても、幼稚園児が言うことを聞かない場合には、たしなめたり繰り返し指示を与えたりする様子が観察された。これらのペアの場合は、交流後に「言うことを聞いてくれない」「交流がやりにくい」と言う児童もいた。しかし、運動会本番でペア幼児と踊りを踊った後には、「楽しかった」「うまく交流できた」という言葉が多く聞かれた。

運動会の練習期間中、観察者は次のことも発見していた。同じように幼稚園児に踊りを教えていた中学2年生は、例えばペア幼児が踊りを習おうとせず遊んでいてもしばらくはそのまま待ち、頃合いを見計らって声をかけ踊りを教える。つまり、ペア幼児の気持ちに沿ってかわりを生み出す様子が観察された。小学4年生にはこのような様子は観察されず、自分の側のペースでかかわろうとしていた。これにより、小学4年生はペア幼児が思ったように反応しないときには、自分のかかわり方が未熟であると捉え、不安感や焦燥感を覚えやすいのではないかと考えられる。

第3回目の交流となる転がしドッチボールと自由遊びでは、楽しそうに交流する児童が多く観察された。これは、前回の交流まであまりうまく交流していなかったペアにおいても同様であった。この回の交流は「出会いの活動」や「運動会練習」に比べて自由度の高い活動内容であったことや、交流の回数を重ねる中でペア活動のペースをつかみつつあったことによると

考えられる。

参与観察の結果をまとめると、出会い前、出会い後を通して、楽しそうに交流している児童が多かったが、男子3人組や一部の2人組でそうでない児童いることが明らかになった。また、それは交流内容によっても異なっていた。

(2) 質問紙調査

4回の質問紙調査における感情得点、行動意図得点、認知得点のそれぞれを用いてward法によるクラスター分析を行った結果、4つのクラスターを見いだした。第1クラスターは50人、第2クラスターは4人、第3クラスターは3人、第4クラスターは15人であった。表1（次ページ掲載）は、各クラスターにおける交流毎の平均値を、「感情」「認知」「行動意図」の3成分毎に示したものである。表1から次のことが明らかになった。

第1クラスターは、4回の調査を通して3成分の得点がいずれも高い群で「全高群」と命名した。「3成分の高レベル一致維持」が特徴で、全体の63.3%にあたる児童がこの群に属していることが分かった。これは、大半の児童がペア活動においてペアとうまくかかわっているということを示しており、参与観察の結果とも一致している。第1クラスターの児童を詳細に検討した結果、男子3人組の一方が8人、及び女子3人組の1人以外の全てがこの群に属していた。このことから、参与観察によってペア幼児とうまくかかわれないとされた男子3人組（4組）のうち、1人はこの群にあり、もう1人は別の群にいたことが明らかとなった。これは、男子3人組の一方の4年生は「感情」「認知」「行動意図」の3成分が高いレベルで一致し、それを維持している一方で、もう一方の男子は3成分のいずれかが高レベルに達していないということである。同様のことは女子では1組についてのみ表れていた。

さらに、女子3人組においては1組を除いて4組、つまり8人がこの群にいた。つまり女子においては3人組のほとんどで「感情」「認知」「行動意図」の3成分が高いレベルで一致し維持されていることが分かった。同様のことは男子では1組についてのみ表れていた。

これらのことから、男子3人組においては一方の児童は交流への態度が高レベルで一致し維持されているが、もう一方の男子はそうではないこと。女子3人組ではそういった傾向は少なく、両者ともに交流への態度は高レベルで一致し維持されていることが分かった。

第2クラスターは、出会い前に比べて出会い時に3

表1 活動内容毎の、各群における3成分の平均値

		1群：50人	2群：4人	3群：3人	4群：15人	分散分析後の下位検定の結果
活動内容		全高群	出会い時態度低群	認知行動意図低下群	感情低下群	
事前	感情	0.179 : H	-0.836 : HL	-1.840 : L	-0.005 : H	1>3,4>3
	行動意欲	0.276 : H	-0.022 : HM	-2.761 : L	-0.361 : M	1>3,1>4,2>3,4>3
	認知	0.299 : ×	-0.599 : ×	-0.898 : ×	-0.659 : ×	なし
出会い	感情	0.018 : ×	-1.253 : ×	-0.000 : ×	0.273 : ×	なし
	行動意欲	0.233 : H	-2.767 : L	-1.367 : M	0.233 : H	4>2,4>3,1>2,1>3,3>2
	認知	0.207 : H	-3.520 : L	0.207 : H	0.207 : H	4>2,3>2,1>2
運動会均	感情	0.324 : ×	-0.645 : ×	-1.041 : ×	-0.701 : ×	なし
	行動意欲	0.346 : H	0.244 : HM	-2.518 : L	-0.714 : M	1>3,1>4,2>3,4>3
	認知	0.295 : H	0.125 : HM	-3.295 : L	-0.359 : M	1>3,1>4,2>3,4>3
ド・自	感情	0.362 : H	-0.150 : HM	-0.823 : M	-1.003 : L	1>4
	行動意欲	0.249 : H	0.249 : H	-3.737 : L	-0.149 : HM	2>3,1>3,4>3
	認知	0.233 : H	0.233 : H	-2.968 : L	-0.247 : HM	2>3,1>3,4>3

註 各群間の平均値の比較の結果として、Hは高い、Mは中程度、Lは低いを表している。

成分の得点が全て低下した群で「出会い時態度低群」と命名した。『出会い時の失敗』が背景にあると考えられる。しかし、この群の児童は第3回、第4回と回数を重ねる毎に3成分の得点が上がっており、問題は少ないものと考えられる。

第3クラスターは、3成分の得点が出会い前に高くなく、活動毎に「認知」や「行動意図」の得点が低下する群で「認知行動意図低下群」と命名した。この群の児童は「出会いの活動」で一旦は3成分の値が上昇するものの、その後は交流を重ねても改善されていない。参与観察の結果と合わせて検討したところ、交流前には「どのように交流してよいか分からない」といった不安感を持っていたこと、交流が始まってからは、「ペア幼児が言うことを聞いてくれない」「すぐにどこかに行ってしまう」など交流のしにくさに言及していたことが分かった。この群の児童は、「交流活動に対する不安やペアに対する不満」を持っていると考えられる。これは、第1年次の研究において明らかになった「不安感」の内容と一致していることから、「不安感」や「不満感」は「認知」や「行動意図」を低下させるものであると言える。

第4クラスターは、交流回数が増えるに従って、特に「感情」の得点が低下する群で「感情低下群」と命名した。この群の児童を詳細に検討した結果、第1クラスターに属する男子3人組の一方が10人属していた。3人組であることや男子であることが、ペア活動

に対する「感情」の得点を低下させる要因の1つと考えられる。

(3) 面接調査

質問紙調査により児童は4クラスターに分類できたが、参与観察の結果とも照合した結果、2人組と3人組の児童においてペア幼児へのかかわり方や3成分の得点の出方に違いがあることが明らかになった。そこで面接調査では、クラスター毎に2人組用、3人組用の質問を準備した。

ここでは、特にペア活動を重ねるに従って3成分のいずれかが低下した群についての結果を示し、考察する。具体的には第3クラスター「認知行動意図低下群」と第4クラスター「感情低下群」である。

①「認知行動意図低下群」

「認知行動意図低下群」の児童3人に対する面接調査の内容は次の通りである。3人はいずれも2人組である。

「認知行動意図低下群」2人組用

- ①ペアさんに会う前の事を聞きますよ。ペアさんとは6月に会ったけど、会う前はどんな気持ちでしたか？
- ②仲良くなれるかなとか、上手に交流できるかなとかいう不安はありましたか？
- ③ペアさんと交流を始めてみて、困ったことはありますか？例えば、言うことを聞いてくれないとか、どんなふうにかかわっていいのか分からないとか。

- ⑭それは、どんなことですか？
- ⑮そんな時、ペアさんに対してどんな気持ちになりますか？
- ⑯交流で困っていることとか、困っている気持ちとかを誰かに話したことはありますか？
- ⑰これからも交流は続くと思うけど、あなたが困っていることを解決するには、どんな方法があると思いますか？

これからも交流を頑張っていくね。これでインタビューを終わります。ありがとうございました。

これらの質問に対する児童の回答の結果は、次の通りである。

認知行動意図低下群
(対象児童：男子1人、女子2人)

⑪：出会う前の気持ち

カテゴリー	例	人
軽い緊張	ドキドキした。	1
軽い期待	以前から知っているけど、覚えているかなあ。	1
意欲無し	交流は面倒くさい。	1

⑫：出会う前の不安感

カテゴリー	例	人
不安	不安があった。	2
意欲無し	不安よりあまり交流したくない。	1

⑬：交流で困ったこと

カテゴリー	例	人
注意無視	言うことを聞かない。	1
幼稚園の反応薄	話しかけても返事が小さい。	1
4年生の無関心	回答無し	1

⑭：困ったときのペアに対する気持ち

カテゴリー	例	人
怒り	怒りたい。	1
焦り	つまらなそう。みんなは仲良くしているのに。	1
無関心	特にない。	1

⑮：困ったときの相談相手

カテゴリー	例	人
学級の仲間	クラスみんな	1
家族	お母さん	1
誰にも相談しない	無し	1

⑯：困っていることを解決する方法

カテゴリー	例	人
かかわり	いけないことは注意する。テレビの話などで引きつける。	2
解決意欲無し	回答無し	1

「認知行動意図低下群」の児童は交流前から緊張や不安、交流に対して前向きでない気持ちを持っていた。3人のうち2人は実際に交流が始まるとペア幼児への対応に苦慮し怒りや焦りを感じていた。これらの児童については、参与観察においてもペア幼児が急になくなったり言うことを聞かなくなったりと、思ったような交流ができていない実態が示されており、本人の不安感に加えて、相手幼児の側にも課題があると考えられる事例である。2人のうち1人は、面接調査の質問④「これまでの交流は楽しかったですか」や⑤「どんなところが楽しかったですか（楽しくなかったですか）」に対して、「言うことを聞かなくて、あまり楽しくなかった」と回答している。また、⑧「ペアさんのことは好きですか」に対しては複雑な表情で「まあ・・・」と即答を避けた。質問④や質問⑧については、クラスターの別を問わず、面接をしたほとんど全ての児童が「楽しかった」「ペアが好き」と答えていたことから、この児童が交流に対して何らかの苦痛を感じていることは明らかである。さらに⑨「どんなところが好きではないですか」に対しては「乱暴なところ」と答え、ここでも課題は相手幼児にもあることが伺われた。この児童が、今後の交流に向けては学級の仲間に相談しながらかわる努力をしようとしていることを考えると、その努力が奏功するよう児童の苦痛を取り除く何らかの教育的方略をとる必要がある。

面接調査の⑪以降で一貫して「交流はあまりしたくない」と述べた児童が1人いた。この児童は①～⑩の質問には交流に積極的と受け取れる回答をしていた。例えば、質問④「これまでの交流は楽しかったですか」や⑤「どんなところが楽しかったですか」に対しては、「一緒に遊んで楽しかった」と答え、⑥「楽しくないときもありましたか」には「ない」と答えた。さらに⑧「ペアさんのことは好きですか」⑨「どんなところが好きですか」に対しては「かわいいから好き」と答えた。ところが⑪以降の質問になると消極的な内容の回答となった。そこでさらに、準備していた質問以外に「交流で何か嫌なことがありましたか」と尋ねてみると、「交流ではなく、交流後のクラスでの話し合いのときに、アンケートの内容を読まれて嫌だった」と答えた。4年生は毎回の交流後に、まず本研究の質問紙調査に回答し、その後学級において交流のふりかえ

りを行っているが、この児童は其中で自分が書いた自由記述の内容を紹介されたことが嫌だった、と答えたのである。これは運動会練習期間中の出来事で、筆者もこの時間に参与観察していたが、この児童が書いていたのは「ペア幼児が言うことを聞かない。もっとうまくかわるにはどうすればいいのか」といった内容のものであった。この時期、多くの児童が同様の悩みを抱え始めていたため、学級担任はこの児童の悩みを4年生の共通の悩みとして共有し、解決方法を話し合おうとしたのである。ペア活動にかかわる悩みを具体的な事例をもとに共有し、解決方法について児童間で話し合わせるという指導法だが、これについては第2年次までの研究で有効とされてきた。このため学級担任はこの児童についても同様の方法をとったわけであるが、面接調査を通してこの方法が適切ではない児童がいることが明らかになった。この児童が⑪以降の質問に消極的になったのは、⑪以降が交流に対する不安や交流で困ったことについての質問であることから、自分のアンケートを紹介された時を想起し再び警戒感を持ったためかも知れない。ただ、この児童は「出会い前」の段階においても3成分が低い値を示していたことから、もともと積極的な気持ちで行ってなかったペア活動において、その悩みを学級の中で紹介されるという事態は受け入れにくいものであったとも考えられる。

②「感情低下群」

第4クラスター「感情低下群」の児童に対する面接調査について示す。先述の通り、この群に属する児童は男子3人組の一方が多く、その相手児童は「全高群」に属していることが大きな特徴である。そこでここでは、「感情低下群」に属する児童の中でも特に3人組児童に注目し、「全高群」の3人組児童と対比させながら考察することにする。

「全高群」及び「感情低下群」の3人組児童への面接調査の内容は共通で次の通りである。

「全高群」及び「感情低下群」3人組用

- ①あなたはペアの○○ちゃんや4年生の△△さんと3人組のペアですが、幼稚園さんが一人で4年生が2人というのはどうですか？1対1のペアよりもいいな、と思うことはありますか？
- ②(①の答えに応じて) どんなところが3人組のよさですか？
- ③反対に、4年生が2人いることで、かわりにくいなあ、1対1のほうがいいな、と思うこともありますか？
- ④(③の答えに応じて) 例えばどんなことですか？
- ⑤3人ペアが仲良くやっていくために、あなたがして

いることやしようと思うことはありますか。

⑥それはどんなことですか？

これからも交流を頑張って行こうね。これでインタビューを終わります。ありがとうございました。

これらの質問に対する児童の回答の結果は、次の通りである。なお、複数回答があるため、合計は100パーセントを越えるものがある。

全高群 3人組 (対象児童：男子10人女子5人)

⑪：3人組の良いところ

カテゴリー	例	%
ア. 遊びや活動の広がり	人数が多い方がいろいろな遊びができる。	46.7
イ. 幼稚園児の孤独回避	4年生が1人休んでも、ペアの子を悲しませないですむ。	26.7
ウ. 幼稚園児の喜び優先	幼稚園の子にとってお兄ちゃんが2人は安心かも。	13.3
エ. 責任集中の回避	1人で面倒を見るのはしんどい。	6.7
オ. 無し	無い	6.7

⑫：2人組より良くないところ

カテゴリー	例	%
ア. 活動の不自由さ	運動会の踊りが踊りにくい。	53.3
イ. 意見の相違	4年生同士で意見が合わないことがある。	26.7
ウ. 4年生への不満	もう1人の4年生が、ペアとかかわらず遊んでいる。	13.3
エ. 疎外感	幼稚園の子がもう1人の4年生とだけ遊ぶ。	6.7

⑬：3人が仲良くするためにしていること

カテゴリー	例	%
ア. 幼稚園児への同調	幼稚園児のやりたいことを聞く。	26.7
イ. 意見集約	4年と幼稚園児の両方の意見を聞く。	20.0
ウ. 言葉遣い	幼稚園児に分かることばを使う。	20.0
エ. けんかの回避	談ったりしてけんかをしない。	20.0
オ. 3人の同調	3人でたくさん話し、遊ぶ。	13.3
カ. 4年生同士の協調	励まし合ったり分担したりする。	6.7
キ. 見守り	ケガをしないように見守る。	6.7

感情低下群 3人組 (対象児童：男子8人女子1人)

⑪：3人組の良いところ

カテゴリー	例	%
ア. 協力・相談	2人だと相談できる。	33.3
イ. 遊びや活動の 拡がり	人数が多い遊びができる。	22.2
ウ. 4年役割の補 完	4年生の1人が幼稚園児を見て、 もう1人が準備できる。	22.2
エ. 無し	無い。	22.2

⑫：2人組より良くないところ

カテゴリー	例	%
ア. 活動の不自由 さ	運動会の踊りが踊りにくい。	44.4
イ. 疎外感	4年生の1人と幼稚園児が活動 するので、もう1人は暇になる。	33.3
ウ. 意見の相違	4年生同士の話がまとまらない。	11.1
エ. 無し	無い。	11.1

⑬：3人が仲良くするためにしていること

カテゴリー	例	%
ア. 3人の同調	3人で動くようにする。	44.4
イ. 幼稚園児への 同調	幼稚園児のやりたいことを一番 に聞く。	33.3
ウ. 4年生同士の 協調	4年生同士がよく話し合う。	22.2
エ. 相手4年生へ の委任	相手の4年生に任せるときは見 ている。	11.1
オ. 無し	無い。	11.1

「3人組のよいところ」として、全高群（第1クラスター）の児童は「幼稚園児の孤独回避」「幼稚園児の喜び優先」といったペア幼児にとってのよさを挙げているのに対し、感情低下群（第4クラスター）の児童は「協力・相談」や「4年生役割の補完」など自分たち4年生にとってのよさを挙げている。また、「3人組のよいところ」は「無し」という回答が、全高群では6.7%であるのに対し、感情低下群では22.2%と15ポイント以上多い。このことから、感情低下群では3人組であることに良さを感じられない児童が多いことが分かった。

「2人組より良くないところ」については、全高群、感情低下群ともに、「活動の不自由さ」が50%前後ある。その例としては、「運動会の踊りが踊りにくい」ことが挙げられており、「ペアでの踊り」という活動内容は3人組には取り組みにくいことが伺われる。一

方、感情低下群に特徴的なのは「疎外感」で、33.3%と全高群の5倍近くを示している。3人組で活動するとき、ペア幼児と主にかかわる児童がいる一方で、同じグループでありながら共に活動できず疎外感を感じている児童がいることが明らかである。特にこの傾向は男子に顕著であることから、男子においては3人が満足感を持って一緒に活動しようとする意識やスキルが女子ほどには働いていないものと考えられる。

さらに「3人が仲良くするためにしていること」について、全高群では7つの行動パターンが示されたのに対し、感情低下群では4つにとどまっている。感情低下群には「相手4年生への委任」や「(仲良くするためにしていることは)無し」という回答もあった。これらのことから、感情低下群の児童は全高群の児童に比べて3人組を維持するための行動をあまりとっていないことが分かった。

ただ、感情低下群の児童においても、3人が仲良くするための行動として、「3人での同調」「幼稚園児への同調」「4年生同士の協調」を挙げている。このことから、3人が仲良くするための行動をしたにもかかわらず「感情」が低下したと見ることもできよう。そうであるならば、3人組であり男子であるという構成は疎外感をもたらしやすい要因であると考えられることができる。

5. 全体考察

質問紙調査の結果、児童は4つのクラスターに分類され、参与観察と面接調査の結果も併せると、そのうち2つのクラスターが交流に対する問題を抱えていると考えられた。

まず、「認知行動意図低下群」については、その原因は交流に対する不安やペア幼児に対する不満と捉えられる。

そこで、交流活動を開始する以前に、不安感を持つ子どもを把握した上で、例えばペア幼児をかかわりやすい子どもにしたり、2人組ではなく3人組にして4年生同士の相談相手を作ったりするなど、不安感を増大させない方策を講じることができよう。

また、交流開始後において、例えばペア幼児の側に課題がある児童については、早めに学級担任が相談に乗ったり、所属学級で悩みを共有したり、解決方法を4年生同士で考えたりすることが有効と考えられる。但し、子どもによってはペア活動に対する悩みを学級で取り上げるよりも教師が個別に相談に乗る方が有効な場合もある。

また、活動内容を1対1で行うものにせずグループで行うものにもすることで、4年生同士の相談や連携

が可能となり、4年生の負担感を低減させることができよう。活動内容については、この群の児童の場合、3成分の中でも「感情」得点は下がりきっていないことから、「感情」得点をさらに引き上げ、それに伴って「認知」や「行動意図」が高まるような交流内容を考えるようにする。

さらに、ペア幼児の担任とも連携し、ペア幼児に対する適切な働きかけを行うことも必要であろう。

次に、「感情低下群」については交流時における疎外感が原因と考えられ、疎外感を生んだ背景として次の2点が考えられる。

① 3人組の交流において4年生児童の一方に主導権があった。

② 3人組という構成をペア幼児にとっての良さとしてよりも自分たち4年生にとっての良さとして捉えた結果、主体的なかかわりになりきれずもう一方の4年生に主導される形となった。

①については4年生同士の関係に起因するし、②については本人の性格特性に起因するとも考えられるが、②によって①が導かれたとも考えられる。そこで、男子で3人組となる児童については、特に日ごろの友人関係を適切に生かした組合せとする必要があるだろう。

3人組の男子は全高群と感情低下群に分かれ、女子は全高群に集中した点は性差と見ることができる。これについては、女子は年下に対しても同年者に対しても気を配りながらかかわる力を持っていると考えることができ、3人組としても特に問題はないものと考えられる。

活動内容については、3人組であっても疎外感を感じることがないように、ドッチボールなど複数のグループによる大きな活動を取り入れたり、4年生のどちらかに主導権が生じやすい「踊りを教える」などの活動ではなく、4年生も年長児も同じ活動を行ったりすることが有効と考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究は第1年次と第2年次の研究結果に基づき、異年齢交流ペア活動に対する小学4年生の態度の実態とその背景を明らかにすることを目的としたものである。参与観察、質問紙調査、面接調査を用い、対人態度の3成分の観点から測定し分析を行った。

その結果、「全高群」に属する児童が50人(63.3%)おり、このペア活動によって多くの児童に抵抗性や持続性の強い態度が育成されたことが分かった。対人関係能力の育成に対する異年齢交流活動の有効性が示されたと捉えられる。

その反面、少数ではあるが「認知」と「行動意図」が低下したり、「感情」が低下したりした児童がいることが明らかになった。特に、ペア幼児と出会う以前から交流活動に不安感を持っている児童や、課題がある幼児がペアになった児童については、ペア活動に対する「認知」と「行動意図」が低下することが分かった。また、3人組で交流する男子においては、一方の児童において疎外感が生まれやすく「感情」が低下することも明らかになった。

従来、異年齢交流活動に関する研究ではうまくかかわっている児童の態度に注目がおかれやすく、態度の3成分のバランスがとれていない児童については見過ごされがちであった。しかし、対人関係能力の育成を目的としたカリキュラムの開発をめざす上においては、うまくかかわれていない児童に対するケアプログラムこそが開発されるべきと考える。第3年次の研究はそのような児童の態度とその背景について、まず実態を明らかにした点で有効なものとする。

今後は、特に3成分が低下した児童に対するケアとして次のような教育的方策が必要と考える。

- ・個別に相談に乗ったり所属学級で悩みを共有したり相手幼児への適切な働きかけを行ったりする。
- ・ペアによる活動だけでなくペア同士で交流したり、4年生と年長児が同じ活動を行ったりと交流内容を工夫する。

これらの方策を用いながら今回同様の調査を追跡的に行い、手だての有効性を確認する。

このようにプログラムの改善を図りながら、どの子どもも3成分を高レベルで一致させ維持させることができる幼小一貫の道徳教育カリキュラムの開発をめざしたい。

【参考・引用文献】

- 神山貴弥 2005 少子化社会における学校での新課題「異校種間交流」の教育効果を探る—社会的スキルの形成、対人関係の変化および新環境移行への適応の視点から—平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- 宮里智恵 2002 「ペア活動3年間の取り組み—子どもたちの意識の流れを中心に—」広島大学附属三原小学校教育研究会編『かかわりを深める総合的な学習の時間の創造Ⅲ』pp72-81.
- 宮里智恵 2005 異年齢の子どもと豊かにかかわる力を育む幼小交流学習 日本道徳教育方法学会第11回研究発表大会 発表要旨
- 宮里智恵 2005 人や集団と豊かにかかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラムの開発 平成17年

- 度科学研究費補助金（奨励研究）研究実績報告書
宮里智恵・井上 弥・鈴木由美子・石原直久・岡野佳子 2006 かかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究 広島大学学部・附属学校共同研究機構 pp155-164.
- 宮里智恵・石原直久・神山貴弥・鈴木由美子・君岡智央 2007 かかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究（2） 広島大学学部・附属学校共同研究機構 pp37-45.
- 森 林 1999 子ども問題の原点としての幼児教育 日本子ども社会学会（編）いま、子ども社会に何がおこっているか 北大路書房
- 中里至誠・松井 洋 1997 異質な日本の若者たち—世界の中高生の思いやり意識— プレーン出版
- 中里至誠・松井 洋 1999 日本の若者の弱点 毎日新聞社
- 成田國英 1996 「生きる力」を育てる異年齢集団活動の展開 明治図書
- Rosenberg, M.J. & Hovland, C.I. 1960 Cognitive, affective and behavioral components of attitude. In M.J. Rosenberg, C.I. Hovland, W.J. McGuire, R.P. Abelson & J.W. Brehm (Eds.) *Attitude organization and change*. Yale University Press. Pp. 1-14.
- 住田正樹 1999 子どもは仲間集団によって育つ 日本子ども社会学会（編）いま、子ども社会に何がおこっているか 北大路書房
- 丹羽さかの・酒井 朗・藤江康彦 2005 「幼稚園・小学校の連携についての全国調査報告」『幼児教育と小学校教育をつなぐ—幼小連携の現状と課題—』お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター
- 土田昭司 1999 「態度の形成」の項 心理学事典 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司（編） 有斐閣
- 山本清洋 1999 子どもが創る遊び 日本子ども社会学会（編）いま、子ども社会に何がおこっているか 北大路書房